

ポットの中は今...

連載をフォロー

14カ国・地域で聞き取り 日本のヘルパーが取り組む「世界のヘルパーに出会う旅」

毎日新聞 2019年9月12日 07時00分 (最終更新 9月17日 16時22分)

石山絵歩

アメリカ 国際 スペシャルリポート 速報 北米 国際 政治プレミアタイムライン



エルシーさん（右）から母国メキシコの介護事情も聞き、「次はメキシコ」と意気込む藤原さん＝ロサンゼルスで2019年6月、石山絵歩撮影

[PR]

世界中を旅しながら、世界の介護現場で働く人から聞き取りを続ける日本人がいる。日本で20年以上にわたり、高齢者や障害者のホームヘルパー（訪問介護員）をやる藤原かさん（63）だ。「世界の介護事情を知る中で、日本のヘルパーの現状を変えていきたい」と話す藤原さんは、これまでに14カ国・地域で聞き取りをした。これまでの聞き取りや日本の課題について聞いた。

- <ポットの中は今...>アーカイブ
- <家事労働者に当たり前の権利を>教育プログラム立ち上げに向けた活動
- <私の通勤は小旅行>職場までバスで3時間半 交通費支給されないロス移民介護士
- <過酷な移民介護士>有給・病気休暇なし、低賃金「労働者として見て」
- <移民介護士、保障や保護なく黙って仕事...>「雇用主は認識変えて」

現場の人間がいない国連会議がはじまり

「世界のヘルパーさんに出会う旅」の始まりは、2002年、スペインで開かれた国連の「第2回高齢者問題世界会議」だ。藤原さんは「日本食しか食べられない」「ベッドで眠れない」と海外に出たことがなかったのだが、20年に1度しか開かれない会議への参加を上司に打診され、「世界中のヘルパーさんに会えるはずだ」と仲間と参加した。しかし、会議場に現場で働く人の姿はなかった。政府関係者やNGOメンバーが圧倒的多数を占める中、藤原さんたちは「平均賃金は月7万円程度」と、日本のヘルパー事情を英語で記したチラシを配って歩いた。



2002年と07年に訪れたイタリアでは

この場では、現場の人の声を聞くことはできなかったが、「人生最初で最後の海外旅行」と考えて旅程に組み込んだイタリア、スウェーデン、デンマークではヘルパーらから直接話を聞くことができた。このことで、他国の事情を知るおもしろさを知った。会議場でチラシを受け取ったオーストラリアの関係者から「来年は必ず私の国に来て」と言われ

毎日新聞のアカウント

RSS

- 新聞宅配申し込み
- デジタル申し込み

ピックアップ

PR

簡単な質問に答えるだけで信用力が点数でわかるAIスコアを試してみよう

Timeline

人間国宝内定・神田松鯉から学ぶ。神田松之丞を育てた師匠から学ぶ部下育成のポイント

話題の記事

江上剛の「働き方は孔子に聞こう!」
パワハラ上司が恐れる「水のように強い部下」とは?

高齢化時代の相続税対策
86歳妻を悩ます「亡夫の残した2億円のタンス預金」

感謝状

迷子の4歳女兒保護 お手柄の能古見小5年・熊本さんに 鹿島署/佐賀

powered by CXENSEI

アクセスランキング

- 1時間 1日 1週間 SNS 動画 写真

毎時01分更新

- 織田信成さん「関大監督退任理由、多忙でなくて嫌がらせやモラハラ」ブログに吐露
- 山梨女兒不明 消防団捜索打ち切り ボランティア男性は無事
- 山梨女兒不明、県警が写真を公開
- キャンプ場で小1女兒が不明 ドローンで捜索 山梨

デジタル毎日 ご購読のご案内

最初の1カ月100円(税別) 有料記事が読み放題!!

詳しくはこちら

言葉が印象に残ったという藤原さん（右から2人目） = 07年、藤原さん提供

始。自費で他国のヘルパー事情を知る旅を続けることにした。

5 迷子、事前にできること 「子どもの視野の狭さ」知って

驚かされる世界の介護事情

世界の介護労働事情を知る中で驚いたのは、ヨーロッパではヘルパーの社会的地位が確立されていることだ。藤原さんの当時の聞き取りによると、スウェーデン、デンマークでは、ヘルパーは公務員で平均給与が月32万~34万円。ヘルパーのストライキが起きた英国には最低基準賃金があった。藤原さんらが英国のヘルパーに「日本のヘルパーは出来高制で、キャンセルが入ればその分の手取りはない」と説明すると、すごく驚かれたという。



スウェーデンで聞き取りをした介護職仲間と記念撮影をする藤原さん（下段中央） = 2002年、藤原さん提供

英中部・リーズ市では、必ず2人1組でヘルパーが在宅訪問をする。事務所と電話で連絡を取り合いながら状況に応じて仕事をし、訪問が10分で終わることもあれば、1時間半以上になることもある。藤原さんは「日本の『生活支援』は1回45分が基本で、炊事、掃除などを詰め込むプラン。英国は時間の余裕があり、利用者ヘルパーの双方にとっていい。日本でストライキをすれば利用者が支援のすべを失ってしまうが、2人1組と人材豊富であることも、利用者が全くケアを受けられないという事態に陥らずにストライキが実現できた理由だと分かった」と話した。

研究者らが施設などを中心に視察するのに対し、藤原さんは、現場のヘルパーに直接会うことに重きを置いている。記者も同行した6月のロサンゼルス旅では、「利用者の尊厳、その人らしさを守る介護とは」に話が集中した。

フィリピン出身の介護士、エミリーさん（60）は、はじめに利用者から料理の味付けを習うという。利用者が亡くなった後、その家族から「あの味はもうあなたしか作れない。レシピを教えて」と頼まれることがあり、「そこまでその人らしい生活に近づけたことがうれしい」と話した。メキシコ出身の介護士、エルシーさん（38）は「メキシコでは相手を尊重することをずっと教えられてきた。例えば介護する立場から着せやすい服を着せるのではなく、その人が着たい服を着るのを手伝う。何においてもその人の好みや、やり方をじっくり聞き、大切にすると語った。

藤原さんは「2人の話は、日本で生活支援に時間をかけることができた頃に先輩から聞いた思い出話と重なる」と話す。日本では12年度の介護報酬改定で、生活援助について「30分以上60分未満」「60分以上」とされていた区分が「20分以上45分未満」「45分以上」へと変更された。藤原さんは「時間を減らされた今は、利用者と一緒に話す時間もない。日本でもその人らしさを求める丁寧な介護を取り戻したい。でもそのためには人材を増やす必要がある」と訴えた。

「この職でずっと生きていきたい」と思えない日本の介護の現状

しかし、日本の介護人材が増える気配はない。日本のホームヘルパーの仕事は「身体介護」「生活援助」に分けられる。「生活援助」では、利用者が自力でできない家事などを援助する。藤原さんは「暮らしの積み重ねがその人らしさを作っているからこそ、エミリーさんやエルシーさんのようにその人の暮らしをできるだけ再現したい。しかし時間が足りないことに加え、『その人らしさ』が世間や自分の常識と重ならない時、どのように利用者や接するかが難しい。そのためにヘルパーは大きな精神的ストレスにさらされ、離職につながっ

編集部のオススメ記事

飲んで走って 仏ポルドーのワインマラソン

＜くらしナビ ライフスタイル＞ 世界最高峰のフランス南西部…

カヌー「ハネタク」乗り越えた言葉の壁

◇カヌー五輪銅メダリスト・羽根田卓也（はねだ・たくや）さん…

おかしみと悲しみに狂言らしさ 野村萬斎さん

東京五輪・パラリンピック開閉会式の総合統括をつとめるなど幅…

🔒 のマークについて

今週のおすすめ

PR

弱小バスケット部がなぜ強豪に

小学生級の指導者に衝撃「選手は機械ではない。人間だ」自ら考え行動する



市場に出ない「おいしい魚」

三越伊勢丹、サステナビリティを意識した話題のキャンペーンスタート！



毎日が囲碁道場

「次の一手」の問題にチャレンジ！【出題】二十四世本因坊秀芳



一日も早い帰国の実現に向けて！

【中高生対象】北朝鮮人権侵害問題啓発週間・作文コンクール募集中



あなたの信用力はどれくらい？

簡単な質問に答えるだけで信用力が点数でわかる AIスコアとは



東京2020オフィシャル新聞パートナー
毎日新聞社は、東京2020大会を応援しています。



2017年の台湾での聞き取りは、食卓を囲みながらペンを握ったという＝藤原さん提供

例えば35度を超える猛暑の中でエアコンをつけずにいる高齢者に、エアコンをつけようという提案すると「これで何十年も生きてきているから口を出すな」と言われたり、虫が湧いているゴミ屋敷のような部屋を片付けようとすると「俺の勝手だ」と怒鳴られたり。

「自分の感情を押し殺さなければならないような精神的負担が大きい反面、そのつらさはあまり理解されていない。さらに薄給となると、若い人が『この職ですっと生きていきたい』と思えないのが日本の介護労働現場

だ」という。「外国人の受け入れは賛成だが、同じ思いをさせると思うとやるせない」と、ため息をついた。

ただ、藤原さんは悲観するばかりではない。旅を続ける中で、労働環境を変えていけば人材は増えるはずだと強く感じている。低賃金や人手不足など介護職の過酷な労働環境に声をあげる世界の同業者の姿にも励まされ、藤原さんとヘルパー仲間は今秋、介護保険法に基づくヘルパーの働き方が労働基準法を守れないものであるとして、国を提訴する予定だ。「ヘルパーは、たくさんのお会いのあるすばらしい仕事。決してつらいばかりではない。旅で得た知識や人との出会いをエネルギーにし、少しずつ労働環境を変え、介護業界で働きたいと思える人を増やしていけたらうれしい」と話した。【石山絵歩】

ポットの中は今...

前の記事

家事労働者に当たり前の権利を 支援団体が教育プログラム立ち上げに向け活動

連載「ポットの中は今...」をマイニュースでフォロー

連載をフォロー

ポットの中は今...

連載一覧



石山絵歩

外信部記者。1984年生まれ、2008年に毎日新聞社入社。岐阜・愛知県警、東京地検担当を経て、東京地・高裁で刑事裁判を担当。事件取材の傍らで、経済連携協定（EPA）によって来日したフィリピン・インドネシアからの看護師、介護士候補生などを取材。18年9月～19年5月、フルブライト奨学金ジャーナリストプログラムでUSCに在籍し、家事労働者について研究。

被災地を応援しよう！災害ボランティア活動の始め方～政府広報 [PR]

新たな台湾の魅力に出会う旅「スロースティ旅行年」特集掲載中！ [PR]

人気沸騰の話芸、講談から学ぶ。気持ちが伝わる空気の作り方 [PR]

大迫力！激しいタックルと緻密な戦略が見どころの球技 [PR]

マンションを売って大損した原因を1ヶ月間考えてみた マンションリサーチ [PR]

自分が買ったワンピースの値段で、子どもが売られていた現実、日本の大学生が始めた活動を30秒で支援！ かものはしプロジェクト on gooddo [PR]

Recommended by

おすすめ記事